**化粧井戸**

化粧井戸と呼ばれる石の井戸はかつて、宗教的な儀式の準備のため、人形使いが木製の傀儡子という人形を洗ったり、服を着せたりするために使用されたと考えられています。傀儡子はその後、勅使街道を下って近くの百体神社へ運ばれました。そこで傀儡子は、大和朝廷に反抗した九州南部の民族である隼人の霊を鎮めるための儀式的な演目に使用されました。

宇佐神宮の記録によると、720年に大和の軍が隼人の反乱の鎮圧に出発し、八幡神は神の加護を与えるために同行しました。隼人はしばらく大和軍に対抗しましたが、大和は傀儡子の演技を利用して気をそらすという作戦を使いました。これにより、隼人は警戒を緩めてしまい、ついには敗北しました。

反乱が鎮圧された後、宇佐地域は飢饉と疫病に苦しんでおり、人々は、隼人の怨霊が原因だと考えました。八幡神からの神託に従い、殺生を贖い、鎮まらない魂をなだめるために、放生会（生き物を解放する儀式）が毎年行われました。また、百体神社で傀儡子を使った儀式を行うことも習慣になりました。その習慣は宇佐では20世紀に消滅しましたが、九州にある八幡古表神社と古要神社という2つの神社で続いています。

現在、化粧井戸は3つありますが、19世紀のこの地域の絵図には、2つの井戸しか描かれていません。この元の井戸の内の1つは、1960年代に埋められましたが、その後で新たに２つの井戸が掘られました。新しい2つの井戸は、八幡古表神社と古要神社の氏子から寄進されたものでした。元の井戸（右側）には、17世紀後半の日付や、井戸の建設に貢献した神職や村人の名前など、さまざまな古い彫刻が石の囲いの部分に刻まれています。化粧井戸は宇佐市の史跡に指定されています。